

☆年間第32主日(11月8日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (知恵の書 6章 12～16節)

知恵は輝かしく、朽ちることがない。知恵を愛する人には進んで自分を現し、探す人には自分を示す。求める人には自分の方から姿を見せる。知恵を求めて早起きする人は、苦勞せずに自宅の門前で待っている知恵に出会う。知恵に思いをはせることは、最も賢いこと、知恵を思っ
目を覚ましていれば、心配もすぐに消える。

知恵は自分にふさわしい人を求めて巡り歩き、道でその人たちに優しく姿を現し、深い思いやりの心で彼らと出会う

第二朗読 (使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 3章 1～3節)

兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください。主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラツパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。

福音朗読 (マタイによる福音書 25章 1～13節)

そのとき、イエスは弟子たちにこのたとえを語られた。

「天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。

愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て、御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

秋らしい天気が続いています。イチョウの葉も黄色く色づき、柿の葉も暑さに打たれて疲れたかのような朽ち果てた色をしています。これから静かに休みを取るのでしょうか。教会の典礼も一気に終末、すなわち私たちの総決算を暗示するものになってきます。私たちが主とお会いする日が近づくにつれて、どのような態度で日々を過ごすことがいいのかが問われているのです。そのような典礼の動きとは別に教会では子どもたちの成長を祝う七五三のお祝いをいたします。子どもたちは教会にとっても大事な宝です。父である神様は私たちと同様にこの子どもたちにも恵みを注ぎ神の国の発展に寄与するように招いておられるのです。ですから私たちはこの

子どもたちを大切に育てなければなりません。それはその子の家族だけの問題、責任ではなくわたしたち教会共同体の責任です。お祝いすると同時にこの子どもたちの信者としての成長に協力してほしいと願っています。

第一朗読（知恵の書 6章 12～16節）

知恵の書はソロモンの知恵とも呼ばれています。ソロモン王の知恵がいかに素晴らしかったかがわかります。この知恵はただ単に頭が良い、賢い、聡明だというものではないようです。物知りだとか、判断力に優れているとも違うようです。現代ではAIというデジタル技術が進歩していて、人間をはるかにしのぐ計算や判断ができる機械ができています。そのAIとも違うのです。強いて言うならば、私たちが創造された方に出会うための道を知ることと言えるでしょう。「求める人には自分の方から姿を見せる」とも言われています。また、「知恵に思いをはせることは、最も賢いこと」とも言われています。能力的な賢さ、聡明さは生まれつきのもともありますから致し方ないところがあるかもしれませんが、「知恵」はそのような生まれつきのものではなく、今望むことが大事なことなのです。祈りながら望むことです。主とともにあることを心から望むことなのです。

第二朗読（使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 3章 1～3節）

この手紙は新約聖書の中の一番初めに書かれた文書だといわれています。西暦50年頃に書かれているようですから、初代教会が誕生して間もなくの手紙です。そのような時期に初代教会では何が問題になっていたのでしょうか。それは「キリストの再臨がすぐにある」と考えられていたことでした。そう考えるとパウロの手紙の切迫感がわかる気がします。その点、今の私たちはまだ遠い先のことだと考えてはいませんか。私たち一人一人にとってはそう遠くの話ではないのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 25章 1～13節)

イエスは今日も天の国について話されます。十人の乙女のたとえ話です。五人の乙女は賢く、あと五人の乙女は愚かでした。賢い乙女と愚かな乙女。イエスはたとえでこのような二者を並べて対比させます。違いを際立たせるためだと思われます。乙女たちが仕えるのは偉い身分の花婿のようですから、器量もよく頭が良かったに違いありません。それなのになぜ「賢い乙女」「愚かな乙女」と言われているのでしょうか。油を十分に持っていたかどうかでしょうか。そのような物理的な、物質的な問題ではないようです。第一朗読の知恵の書でも知恵というのは頭の良さではないといわれています。ここで問題になっているのは「花婿と一緒にいることを望む」ということだと思います。「花婿がやってきたときにその場にいること」が大事なのです。愚かな乙女は油に気を取られてその時に席を外していたのです。主はいつ私たちを迎えに来られるかわかりません。主が来られた時に目を覚ましているようにしましょう。これこそ聖書の言う「賢さ、知恵」なのではないでしょうか。

P.S.

ヨーロッパでも新型コロナの感染が再び拡大しています。日本でもじわりじわりと増えています。もう一度感染対策を思い起こして、基本に戻って実行しましょう。一人一人が気を付けることがみなを守ることになるのです。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光